たけうまファンド

2022年2月28日基準

運用実績

1ヶ月	3ヶ月	6ヵ月	1年	年初来	設定来
0.8%	-7.3%	-7.3%	7.7%	-7.7%	1285.8%

※ 証券口座現在の資産残高基準。投資信託、iDeCo、仮想通貨、FX（外貨証拠金取引）は含まず。
※ 過去の実績データがない期間においては数字を未記載としています。

ポートフォリオ構成

実質株式保有比率		94.8%
	国内株式	55.8%
	海外株式	38.9%
現金（円・ドル）		5.2%

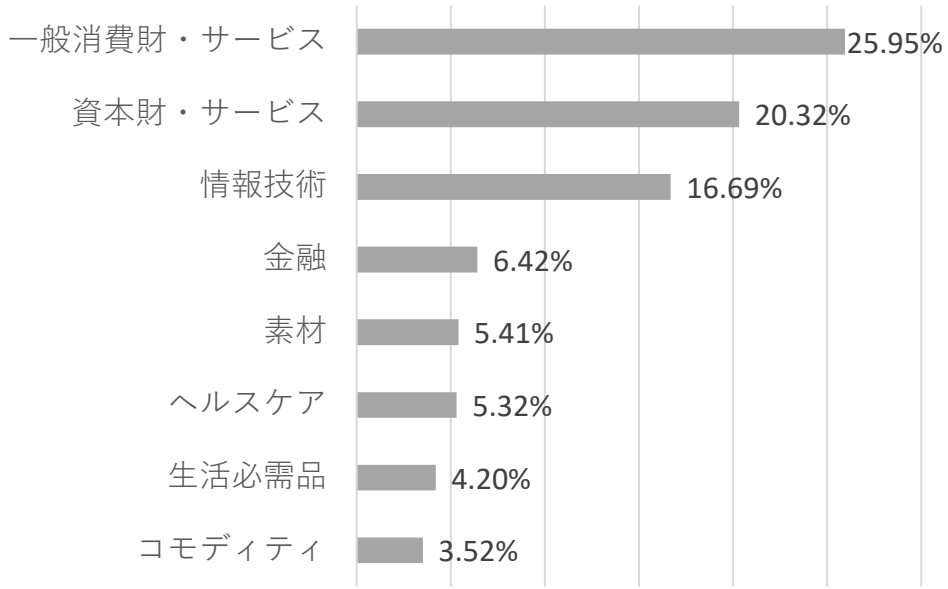
※比率は証券口座の現在の資産残価に対する割合

分配実績

設定来累計分配金　0円

※上記の分配金は過去の実績であり、将来の分配金の支払い及びその金額について保証するものではありません。
※成長ないので分配なし。

業種別組み入れ比率



※ 業種はGICS（世界産業分類基準）によるものです。今月からきちんと分類しています。
※ 分類できない商品はコモディティとしています。
※ 優待株は含まず。

たけうまファンド

2022年2月28日基準

たけうまファンドの組み入れ銘柄の状況

組入上位10銘柄

	銘柄名	比率 業種	銘柄紹介
1	ウルトラファブリックスHD（4235）	16.52% 一般消費財	ポリウレタンレザーの製造販売。アニマルフリーである点がとてもESG。テスラ車のシートに採用。
2	ServiceNow, Inc.（NOW）	11.59% 情報技術	ITSM主力のSaaS。業務の自動化、DXは生産性向上に資するため人手不足・高インフレ下でも需要大。
3	オカダアイヨン（6294）	6.87% 資本財	解体用アタッチメント。建替え、電炉、バイオマスなどで市場拡大。今期が設備投資のピーク。
4	MSCI Inc.（MSCI）	6.42% 金融	指数を開発販売。株価指数の提供だけにとどまらず、ESGやファクター含めマルチアセット市場狙う。
5	Tapestry, Inc.（TPR）	6.32% 一般消費財	コーチやケイトスペード擁する婦人アパレル製造販売。経営危機から復活再生中。コロナ明けに期待。
6	シンメンテHD（6086）	6.29% 一般消費財	飲食店厨房メンテからコロナ機に小売りサービス業へ拡大。人手不足と感染対策を兼ねる空調に注力。
7	上村工業（4966）	5.41% 素材	半導体向けメッキ薬品のほぼ専業。バリュエーション、資本政策、好取り組みの点で組み入れ。
8	Align Technology, Inc.（ALGN）	5.32% ヘルスケア	透明マウスピース型歯科矯正大手。口で表情を読み取る文化圏においてきれいな歯並びは重要。
9	CrowdStrike Holdings, Inc.（CRWD）	5.10% 情報技術	クラウドからスタートしたエンドポイントセキュリティ企業。顧客のクロスセル進み高い営業効率。
10	ベネフィット・ワン（2412）	4.87% 資本財	福利厚生アウトソーシング。既存客法人への経費精算などHR分野でのアップセル狙う。

※ 上記は組入銘柄の紹介を目的としてたけうまが作成しており、記載銘柄の推奨を行うものではありません。

たけうまファンド

2022年2月28日基準

ファンドおよびマーケットへのコメント

激動の2月が終わりました。今でこそもうずっと長く戦争状態にあるような気がしていますが、2月は始まった頃はまさか自分が生きている間に戦争が起きるとは全く考えていませんでした。未だに現実のこととは思えません。

相場は月初の立ち上がり1月末の金融引き締めおよびポリシーエラー懸念の高まりが極まったボトムからの立ち直りの途中スタートし、戦争開始からのリバウンドがひと段落というところで月末を迎えたこともありなんとかプラスで終えることができました。本当にわずかなのもありますが、全く増えた感じがしていません。

それもそのはず。内容的にはほとんどの保有銘柄が下落する中、今期ガイダンスが高く中計も意欲的な数字ながら相当固めに見積もっているというウルトラファブリックスがひとり気を吐いてファンド全体を牽引してくれていただけなんですね。買い増ししていなにも関わらず比率が大きく上昇しています。まさに一本足打法状態。

さて、そんな当ファンドの2月のトピックスとしてはまず引き続き保有銘柄の決算がありました。中でも好調が目立ったのはタペストリーでしょうか。年末商戦を含む2Q決算で最高の数字を叩き出し通期ガイダンスを全ての項目で上方修正。株価こそあまり反応していませんが好調な数字に来期以降の期待も高まります。売買では、ロシアがドネツクとルガンスクの親露派支配地域を独立国として承認、ここをウクライナから守るために派兵するというニュースが飛び込んできた23日祝日に投資判断を大幅に変更。この日まではロシアとウクライナの睨み合いは早期に終わると考えていましたが、長引く可能性が高いと軌道修正しました。これによって買い長で成長をイーアスクルに頼るニチコンを全て売却し、純国内のみで取り組みよく原価もかからず価格設定も自由で配当もいい明豊ファシリティワークスを購入、上村工業も追加しました。またインフレヘッジとして穀物系ETF（穀物・コーン・小麦・大豆）を購入し、月末の週末にロシアをSWIFTから締め出す制裁を決定したのを受けて最終日に小麦に一本化しました。

米国株はグローバルナンバーワンのグロース企業という方針は変わりなく、その分、逆に日本株はバリュー＆インフレ対策という役割を負っている形が明確になりました。

開戦後の株式市場のリバウンドはどうやら金融引き締めスケジュールが緩やかになるという観測からのようです。今の自分の考えは初夏にインフレピークではなくさらに後ろ倒しになったので、これで引き締めを緩めればインフレが制御できなくなるリスクやそう遠くない景気後退時の緩和幅を失うことにもなるので逆にまずいのでは、と思うのですがそもそも景気後退にまではさせられないというのもあるのかもしれない、とも考えています。そうすると戦後復興のためインフレでも金利を低位に維持し続けたという第二次大戦後と被ってくるわけですが…

今月は金融政策とは別にドイツの紛争関与および電源政策スタンスの大幅な変更というのもありました。いろんなことが同時並行で起きていてわからないことだらけですが、ボラティリティにメンタルがやられないよう資金管理を怠らず着実な資産の成長を目指してまります。

※ 今後の見通しと運用方針は作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等により当該運用方針が変更される場合があります